

〈春を聴く〉

私的「春の名曲ガイド」

～春の予感への愛おしさが
ひたひたと押し寄せてくる「待雪草」、
淡い余韻がこだまする「春に」、他



スノードロップ [待雪草] (2枚共)
(写真提供：日比谷花壇)

内藤 晃 (ピアニスト)

四季。それは自然の神秘が織りなす生と死のサイクルであり、春の訪れとともに再生の時を迎える。雪解けとともに草木がいつせいに芽吹いて花咲かせるとき、新たな希望の予感に人々の胸は疼く。古今の作曲家たちも例外ではなく、「春」を題材に、憧れや生命力に満ちたあまたの名曲が生み出されてきた。

冬から春への移り変わりは、四季の中でも最もドラマティックで美しい時期のひとつだ。人々は、特定の草花や鳥の声に春のきざしを感じとり、胸を躍らせる。そんな花のひとつが、スノードロップ (和名：待雪草^{マツユキソウ}) の花で、冬の終わりが春先に咲く下向きの白い花 (スノードロップの名のとおり雪のしずくを思わせる) が、春の到来を告げる象徴とされてきた。シューマンの歌曲「待雪草」(Schneeglöckchen) Op.79-26は、雪そのものが待雪草のような姿でぶら下がり、鈴を鳴らし春を呼んでいる、という情景を詠ったリュックケルトの詩につけられたもので (待雪草のドイツ語 Schneeglöckchen は直訳すると「雪の鈴」)、高い音域でぼつりぼつりと奏されるピアノの下降分散和音から、春の予感への愛おしさがひたひたと押し寄せてくる。チャイコフスキーの「待雪草」(Perceneige) (ピアノ曲集「四季」Op.37bの「4月」) もさわやかな佳曲で、背後の和音が奏でる弱起のリズムが、あたかも春の足音、生まれくる命の鼓動のようだ。

イギリスでは、花咲く頃に鳴くカッコウが、古

来から春を告げる鳥として歓迎されてきた。デイリアスの「春初めてのカッコウを聴いて」(On hearing the first cuckoo in spring) は、小編成の短い管弦楽曲だが、春の訪れを静かに嘯みしめるのうたってつけのラヴリーな音楽だ。穏やかな田園情緒あふれる弦楽のデリケートな旋律に乗せて、クラリネットが「カッコウ、カッコウ」と鳴き交わし、ノルウェー民謡「オーラの谷で、オーラの湖で」から引用された旋律 (第2主題) が、甘美なノスタルジーをそそる。このノルウェーの旋律は、グリーグが「19のノルウェー民謡」Op.66の第14曲でピアノ編曲しているもので、デイリアスも、親交のあつたグリーグ作品を通じてこの旋律を知った。デイリアスは、このような管弦楽曲を、交響詩 symphonic poem ではなく音詩 tone poem と呼んだが、彼の綴った音の詩は、自然への愛情あふれた名作揃いで、春を描いたものではない。「春の牧歌」(Idylle de printemps) も印象深い。

ヴォルフのメーリケ歌曲「春だ！」(Erists) は、春を迎える喜びを高らかに謳い上げたものだ。ここでは、タイトルでも (Er||彼) 詩でも (du||君) 春が擬人化されていて、生きた存在としての春の息吹をありありと感じさせる。「春、そう君だ！君の足音を僕は聴いたんだ！」と春に呼びかける詩人メーリケ。ヴォルフの付曲は色彩と官能にあふれ、リズムカルに湧出する上行分散和音に乗せて、まばゆいばかりの高揚感とともに喜びが躍動する。このメーリケの詩にはシューマンも作曲して

いて(Op.79—24)、聴き較べてみるのもまた一興だ。

ロシアのコンポーザー・ピアノスト、メトネルのピアノ曲「春」(Primavera) Op.39—3も、爆発的な春の喜びが横溢する。北国の春の訪れはかくも劇的なものなのだ。この小品は私の愛奏曲のひとつだが、ペンタトニックの親しみやすい旋律とピアノスティックに煌めく演奏効果が鮮烈な印象を残し、通好みのメトネル作品中でも異彩を放っている。ピアノストの皆さんに、是非ともアンコール・レパートリーに加えていただきたい佳品だ。同じロシアでは、ラフマニノフの歌曲「春のせせらぎ」(Бегущие воды) Op.14—11も忘れ難い。春の水は「春が来たよ!」と歌っているのだ、というチュチェフの詩。雪解け水がどつと噴出するようなエネルギーがピアノにただただ圧倒されるのみ。

そして、私がひととき心惹かれるのが、シューベルトが慎ましく歌う春である。たとえば、「春の信仰」(Frühlingsglaube) D.686。詩人ウーラントは、美しい春の訪れを歌い、「さあ、あわれな心よ、もう心配するな! 今こそすべてが変わる



ニコライ・メトネル

のだから。」と自らに語りかける。これは春の到来とともに、自身の沈んだ心を奮い立たせようとする歌なのだ。シューベルトの音楽は、一抹の寂寥感とすがすがしい希望への意志を滲ませつつ、春風のように穏やかに流れゆく。なんの押しつけがましきもなく、「ああ、春だなあ」という感慨とともに、前を向く心持ちが静かに湧き起こる。

内気な青年だったシューベルトは、その音楽も本質的にはシャイだ。あくまで自然体で、作曲家の自己主張を感じさせない。私たち聴き手を音楽の内側に優しく迎え入れ、それぞれの心象風景を気ままに投影させてくれる。そんな普段着の心地よさが格別で、ふらつと散歩にでかけるような感覚でシューベルトの音楽に浸りたくなる。

「春」(Im Frühling) D.882は、春の日差しをのなか、好きだった人の思い出を懐かしく回想する歌だ(シュルツェ詩)。ここに寄り添うシューベルトの音楽が、あまりにも美しい。シューマンの「詩人の恋」のような失恋の怨念はなく、ただただ、遠い日の幸せな記憶にしみじみと思いを馳せる。

シューベルトの初恋の人テレゼ・グロープは、17歳のシューベルト少年が教会に書いたミサ曲第1番へ長調のソプラノ・ソロを歌った歌姫で、シューベルトが定職に就けなかったため他の男性と結婚してしまった。このキリエ章のあこがれに満ちたソプラノ・ソロには、思春期のシューベルトがテレゼに寄せた想いの丈が詰まっている。彼は、テレゼの結婚後も、「今でも好きだ

し、あれ以来彼女以上の人は現れないんだ」とこぼす(友人ヒュッテンブレンナーの証言)。そして、もてない貧乏芸術家の宿命を受け入れたシューベルトは、31歳で夭折するまで、ひとり美しい追憶をよすがに作曲のペンを走らせる。

手の届かない憧れを歌うとき、その憧れはいつそうピアノで切実なものとなる。シューベルトの諦念は、澄み切った音楽として昇華された。「春に」の音楽は、あたかも春の日の散歩のように穏やかで、シューベルトは詩節とともにピアノに変奏を加え(変奏有節形式)、思い出が走馬灯のように蘇る。詩人の心にくと悲しみがよぎる最終節。旋律のかけりはほどなく浄化され、優しい春のぬくもりに包まれながら、淡い余韻がこだまする。「ああ、僕が小鳥だったら、あの枝にとまって、夏の終わりまで君の歌を歌いつづけるのに——」。私が最も愛する春の音楽のひとつである。



左から、ヨハン・バプティスト・イエンガー、アンゼラム・ヒュッテンブレンナー、フランツ・シューベルト